

2019年度 研究のまとめ

【研究主題】

対話の中から深い学びを求める授業の創造

～全員参加の授業づくりを通して～

今年度の主題を設定するにあたり、学校経営方針に基づいた「めざす児童像」や目の前の子ども達につけていきたい力を全教職員で共通理解した（P2～参照）。2本の全体研究の提案授業、学年部の実践として多くの互見授業（冊子には入れていないけれども、一人で複数の授業を見せてくれた方もいるので「多くの」と表記させていただきます）、また、学年部研修として板書写真を持ち寄り、授業改善研修を行った。提案授業とその事後研での授業の検証や互見授業で感想を交わし合ったり、平素の授業実践を持ち寄って話し合ったりする中で明らかになったことを自分の授業に取り入れることで、日々の授業改善を図ることができた。5年担任が長洲中ブロックの人権レポートを公開し、他にも、プログラミング教育研修、学力テストの分析と考察などを通して、研修を深めることができた。

今年度の研修を通じて、年度当初にめざしていた子どもの姿に近づけることができたであろうか。私たち教職員に授業力の向上が見られたであろうか。全体研究、学年部実践を研究仮説や手立て、研究内容などを基に今年度の研修を振り返りたい。（○成果 △課題）

【研究仮説】 主体的に意見を持つことのできる課題設定や子ども同士の対話の工夫をすれば子どもたちは主体的に考え、学びを深めることができるであろう。

【課題設定と提示の工夫（主体的な学びの保障）について】

① 「課題を引き受ける」ために、子どもの思いを確かめる。教材の工夫をする。

○国語では、題材となる文章を子どもたちがどう受け止め、どのような考え、思い、疑問を持つかというところから課題設定をする。→子どもの思考から課題を設定することを大事にする。

○算数では、既習の内容をもとにしながら、どんな問題、設定にすると興味を持てるか、という教材作りから吟味、工夫をする。教科書の教材も発達段階に応じた適切な内容であるが、学級の実態に合わせた教材にできていることが研修の成果である。

○国語でも、挿絵にとらわれずに文章から読み取る力をつけるというねらいをもって、教科書から教材文のみを取り出して提示する授業提案もあった。

② 「課題を引き受け、自分の意見をもつ」ために、手立てを講じる。

○導入の工夫。教材の工夫も重なるところがあるが、前時の子どもたちの意見を振り返って、とか、算数で言えば問題文の物語性で子どもを引き付ける、といった導入の工夫も有効である。

○二者択一の課題にして自分の意見を持ちやすくする。→どの子も引き受けやすい課題

○考えの基盤を持てるようにワークシートやセンテンスカードを準備する。

○操作活動ができる数図ブロックや九九パズルを準備することやタブレットや動画で課題に向けて意識を高めることを工夫した。

○揺さぶりの発問、追及課題の設定、ぶれずに課題をもとに考えさせることができる課題になるように「課題を吟味して」提示する。

○前時の学習内容から引き続き思考していき課題を設定することで自分の意見を持ちやすくする。

△課題に対して（根拠のない憶測ではなく）確かな思考に基づいて予想ができるように、発問や前時のまとめとの関連付けが必要であると感じた。

△教師の模範作業や例示にとどまらず、実際に自分で書くことで驚きと探究心をもったり、自分の考えが明確になったりすることが期待できるので、「書く時間」の保障をすると良い。

△書く時間の保障があっても、前時までの流れの掲示など書くための振り返りの材料を明示できればよかった。

【ペア・グループ学習における支援（対話的学びの保障）について】

○日常的にホワイトボードで意見をまとめたり、ネームプレートで意見を位置づけたりすることでグループ学習の方法の定着を図ることができている。

○課題について考えを持つときに利用したセンテンスカードやワークシート、九九パズルなどがペア、グループ学習で対話する際にも利用できた。

○ペア学習によって、自分の意見が持てなかった子がペアの子の考えを聴くことで、一斉の学習では自分の意見を持って臨むことができた。一斉学習の前にペア学習を位置づけたことが、課題を十分に引き受けられなかった子には有効である。

○△ペア、グループ学習で話す中で、自分の考えが変わってしまう子がいる。授業細案や机間指導の中でイメージしていた発言がなくなることが学習の進行、互いの考えの深まりに影響を及ぼすことがある。←個々の意見の見取りを確実に言い、意見を引き出せるようにしておきたい。

△授業のねらいに沿った学習活動を仕組むことができていなかった。

△ペア学習、グループ学習での対話の必然性のある状況を作ることができたのか。

△意見の交流が行われやすい話し合い方の在り方を研修できるとよい。（学年に応じた話し合い方のパターンを交流するなど。）

【全体を通して】

○並行読書を行って教材や学習に興味・関心・意欲を持たせることは、どの学年にも有効であり、どの単元で実施するか予定しておくとうよい。

○その学習に必要なものは何か―既習事項、学習に関する技能（ブロック操作、分度器やコンパスの使い方など）、腹式呼吸の方法など―を確認して、学年で学習させなければならないことの定着を図らなければならない。

○ペア、グループ、学級集団、教師と児童、異学年とのコミュニケーションが授業の土台になる。生徒指導の三機能を意識した授業づくり、「友達と共に学びたい」という態度の育成が望まれる。

今年度の研修を振り返り、来年度の授業づくりに生かしていけるよう、教職員同士も忌憚のない意見交換をしながらより良い指導をつなげていきたい。